第二部

研究の実際

小学部　主体的に行動できる力を育てる授業改善

1　はじめに

小学部は男子 19 名女子 7 名の計 26 名の児童に対し、教員 17 名で指導に当たっている。

遊びの指導（低学年のみ）・音楽・体育・生活単元学習の一部は、集団で活動しており、１年生から３年生の低学年グループ（13 名）と４年生から６年生の高学年グループ（13 名）の２つのグループで構成されている。

授業改善プロジェクトを受け、小学部では、生きる力を基礎的・基本的な知識・技能の習得、学習意欲の向上や学習習慣の確立と捉え主体的に行動できる児童の育成を目指し、「みんなで楽しく いきいきと やってみよう」をスローガンとして生活単元学習を中心とした授業について研究することとした。

2　目的

生活単元学習は、生活上の目標を達成したり課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習するものである。そのため、実態把握が重要であり、引継ぎを十分に行う必要がある。その実態をもとに指導目標を設定し、指導内容・指導方法を検討することになる。また、授業改善ということで研究を進めるにあたり、今までの指導を振り返ることとした。そして、単元を再度見直したり、指導目標を達成するために、どのような方法があるか、どのような指導内容があるか、教材教具の工夫、学習意欲の喚起、支援の方法、言葉掛けの技術などを話し合うことにより、授業者としての資質の向上を目指す。また、授業の基本的な事項を一つ一つ確認して基本に立ち返った授業を行うことで技術面での向上を目指し、授業改善につなげたいと考える。

3　方法

（１）「個別の指導計画」「年間指導計画」の検討・作成をする。

・一人一人の実態を把握した「個別の指導計画」を作成する。

・各教科との関連性を持たせた生活単元学習の年間指導計画を作成する。

・単元ごとに各教科の目標を明らかにしながら、「個別の指導計画」に基づく指導目標を設定する。

（２）学年グループでの話し合いを通した個々の指導目標・支援の手だてについて共通理解を図る。

（３）具体的な指導内容・支援の手だて・内容・教材・教具・ティームティーチングの在り方等についてグループで研究する。

（４）個々の教師の授業力向上を目指し、学習指導案の作成や授業研究などの話し合いをする。

（５）授業研究会については、本校作成の参観者用授業評価シートを活用する。

4　実践内容

（1）「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を検討し作成した。

一人一人の実態把握については、新入生、転入生に対しては出身の保育園や療育機関、以前に在籍していた学校へ出向き移行支援連絡会を行った。また、例年は夏休み中に実施していた家庭訪問を今年度は１学期始めに実施し、家庭の状況や児童の様子、保護者の願いについて聞き取りをした。それらの情報と共に、日々の行動観察を行い実態把握に努め、保護者の願いを聞きながら学級担任が中心となって「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を作成した。

（2）「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を基に学年グループで話し合い、個々の指導目標や支援の手だてについて共通理解を図り、年間指導計画を作成した。

（3）具体的な指導内容・支援の手だて・内容・教材・教具・ティームティーチングの在り方等についてグループで研究した。

5　授業実践について

（1）今までの授業について振り返り、「よい授業」のイメージを作る。

うまくいった授業とうまくいかなかった授業を振り返ってみた。

そこから見えてきたよい授業とは、以下の 6 つがポイントであることが分かった。

ア　実態把握が的確にできている。

イ　指導内容・指導方法が児童に合っている。

ウ　教材教具が適切に用意されている。

エ　支援が適切である。

オ　ティームティーチングできている。

カ　環境が構造化されている。

（2）一人一人がよりよい授業を目指すため、改善点を整理した。

6 月
・伝わる説明をしてまず子どもにさせる。 ・「褒められる→うれしい→自分で動く」を原点とする。 ・過剰な言葉掛けをしない。 ・生活や授業など体験場面で丁寧に支援する。 ・将来の本人の力を見据えて急がず支援する。 ・支援の在り方を見直す。 ・子どもから教師に支援を求める場を作る。 ・すぐに成果を求めるのではなく、正しいやり方を何度でも繰り返し教えていく。 ・信頼関係を大切にする。 ・視覚的支援を増やす。

・T1 が中心となり、T2 以下の動きを明確に指示する。
１１月
・児童の目線に立って対話を行う。 ・笑顔と心温まる対話を心掛ける。 ・教師として見本となる言葉遣いをする。 ・分かりやすい言葉で伝える。 ・視覚的な手がかりを組み合わせた言葉掛けをする。 ・声の調子に工夫を凝らす。 ・評価しやすい目標の設定をする。 ・直接的な支援を減らす。 ・本人ができることをじっくりと待つ。 ・こうすればできるという支援を工夫する。 ・活動内容を精選する。 ・始まり、終わりのけじめをつける。 ・制作時の道具や材料を適切に配置する。 ・子どもの座る位置など環境・場の設定を適切に行う。 ・臨機応変に対応する。

（３）授業を通した事例

授業実践１　「段ボールハウスで遊ぼう」１・２・３年生

ア　授業前の検討事項

項　　目	検　　討　　事　　項
単元の題材	主体的な行動を引き出すための興味ある題材の選択
環境整備	興味を引くための教材教具の研究 遊びに集中できるための環境の工夫
段ボール遊び教材の配置	安全面を考えた段ボールの配置や教師の配置
教材・教具の工夫	主体的行動を促すための工夫 ・製作のコーナーを作る ・好きなキャラクターをつける
支援	友達や教師との遊びを促す支援 穏やかな語り掛け・誘い

イ　指導案（単元についてのみ記載）

生活単元学習では、単元設定の理由を明確にし、単元観・児童観・指導観の共通理解を図ることが指導の方向性を決める上で大切である。

（ア）単元観

児童自身が主体的に見通しを持って活動できる生活を目指した指導が大切である。特に発達が未分化な低学年児童の実態を考えると、遊びに関する内容を取り入れ、主体的な活動を促すことが必要であり、児童の生活に

身近で、興味を持ちやすい題材を設定することが重要となってくる。

新聞紙、折り紙、花紙、段ボール等児童の周辺には、いろいろな紙があり、身近な素材である。硬さ、手触りがそれぞれ異なり、形も自由に変わることから、児童が扱いやすく、楽しめる素材であると思われる。また、丸める、ちぎる、破る、組み立てる、色を塗るなど素材を使った活動もいろいろと考えられ、児童が好きな活動を選び、取り組むことができるのではないかと思われる。また、友達や教師と協力して運んだり、受け渡しをしたり、複数で一つの作品を作ったりと、人とかかわりながら活動する面においても適した題材であると考える。

（イ）児童観

身体面、社会性、コミュニケーション面など実態は様々で、友達同士のかかわりについては、一人遊びを楽しむ段階の児童や教師とのかかわりを楽しむ児童が多いが、同じ場で好きな遊びをしながら、友達の様子を見たり、遊びをまねたり、好きな友達とかかわったりする様子が見られ始めた。

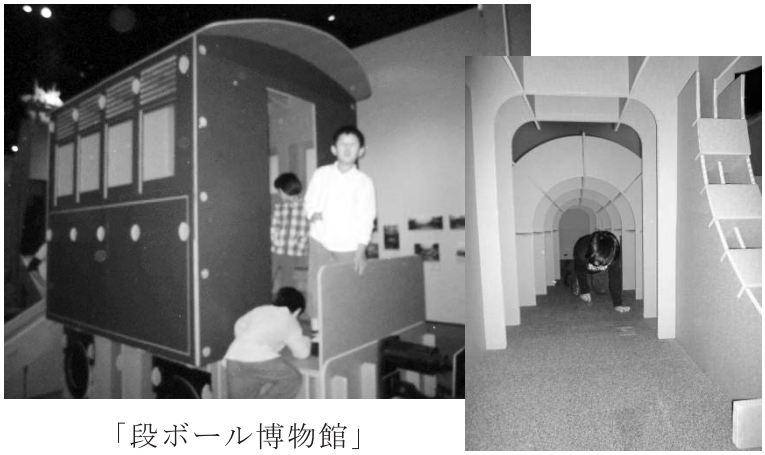
ほとんどの児童が全身を使ったダイナミックな遊びや感触遊びを好み、自分の好きな遊びに集中して、楽しむことができている。制作活動については、道具の使い方、描画の状態、好きな制作活動などその実態については様々である。

（ウ）指導観

本単元では、紙の可塑性を利用した活動やゲーム、作品作り、最終的には、それを総合的に組み合わせて遊ぶことを通して、いろいろな紙素材の感触を楽しみ、全身を使っていろいろな活動に取り組むことで、自分の好きな遊びをそれぞれの児童が見つけることができるよう、また、素材を仲立ちとして友達同士のかかわりが深まるよう指導していきたい。

（エ）指導目標

・いろいろな紙素材の感触を味わい、積極的に好きな遊びをする。
・紙素材を使った活動を楽しみながら、友達とのかかわりを深める。



「段ボール博物館」

「段ボール遊び」

ウ　授業後の取組

（ア）参観者評価シートによる第三者評価の検討

＊参観者評価シートより（抜粋）

よかった点	改善したらよい点
・教師自身が楽しんでいた。 ・子どもの動きに共感していた。 ・気持ちをひきつけていた。 ・教材・教具の準備ができていた。 ・集中できる環境づくりがなされていた。 ・いろいろな活動が準備され意欲が見られた。 ・待つ支援ができていた。	・安全面の配慮が必要である。 ・T2 が、特定の子供についてしまう。 ・役割分担しても子どもの分担はしないほうがよい。 ・片付けの時間の配分を配慮する必要がある。 ・飛び出す児童への配慮が必要である。 ・教師に許可を得るルールが必要である。 ・出入り口の教師配置がよい。 ・制作コーナーに椅子があればよい。

（イ）上岡一世先生の指導助言を受けての改善点

a　実態把握

・主体的な行動に焦点をあてた実態把握をする。

b　目標の設定

・評価できるためのより具体的な目標を設定する。

（「きちんと」などを使わない）「はさみを元の位置に片付ける。」

・１時間で達成できる目標を立てる。

c　グループ内で個別の指導計画を持ち寄っての話し合い

・教師間での共通理解を図る。

d　授業をするに当たっての共通理解

・子どもの課題を明確にする。

・支援方法を確認する。

・支援者の割り振りと評価の方法を決める。

・教師の配置をする。

e　自立的な支援

・過剰な支援を省く。

・構造化について考える。

f　指導体制

・児童数に対して単純に教師数決めることはできないが、できるだけ少ない教師で授業ができるように検討する。

・教師の数に応じた質の高い支援をする。

（ウ）改善した授業の実践

話し合いを踏まえて、次時に「段ボールハウスで遊ぼう」の授業を実施し、準備の様子や遊びの様子など、主体的な行動にポイントを絞って授業を行い改善を図った。

（エ）年間指導計画に記載されたこの単元の反省

この単元は全部で１０時間の計画であったが、一つ一つの活動が短くもっと時間を取ったほうがよかった。児童の主体的な活動を引き出すという観点

から遊びに関する内容を中心に行った。限られた空間で自由に遊ぶということが難しく児童の興味のある遊び道具を準備することで自発的に遊ぶことが少しできていた。友達同士でのかかわりについては教師の支援の工夫が必要であった。新聞紙・段ボール、児童それぞれに好きな素材や遊び方があり楽しい活動になった。歴史文化博物館での段ボール遊びの校外学習は全員が楽しめる内容であり、貴重な経験となった。段ボールハウスはトンネルや滑り台でダイナミックに遊べる活動だった。準備も意欲的に行った。低学年合同での学習のほかに学級において「段ボール展に行こう」の事前学習をしたり、教室で段ボールのミニハウスを作ったりして学習に取り組みやすいよう工夫した。紙の感触に触れる時間が十分に取れ、段階を追って段ボールに移行できた。

授業実践２「 秋を楽しもう」1・2・3年生

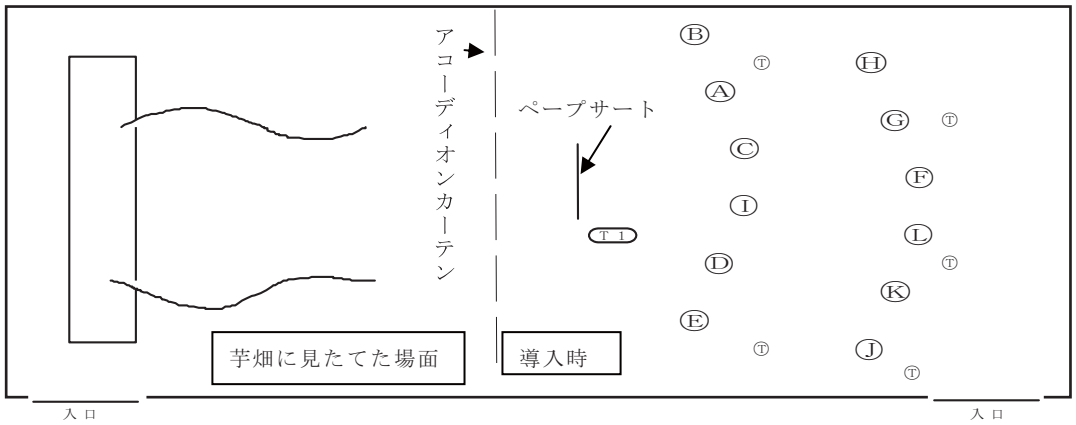
前回の授業の改善点

ア　指導者の適正配置

座席配置の検討。

学習環境を整備し、活動内容により教室の広さを変える。

－教室配置－



イ　児童の実態把握

的確な実態把握による目標の設定。

その時間に達成でき、評価ができる具体的な目標を設定し、評価をする教師を明確化する。

個人目標を具体的にする。（一部抜粋）

「集中する」「楽しむ」など抽象的な表記ではなく行動として表記する。

・ペープサートに注目し、指差しをする、声を出すなどの表現をする。

・活動内容が分かり、つるを引っ張る、芋を拾う動きをする。

・そばにいる教師の支援によって、動く、声を出すなどの表現をする。

・そばにいる教師の言葉や動作を模倣する。

・教師の言葉掛けでつるを引っ張る、芋を拾う動きをする。

ウ　授業の展開

時間	学習活動	教師の支援と手立て･評価の視点 □		
		D、I	A、E、K、L	B、C、F、G、H、J
10：45 （３分）	1　『おいもの体操』をする。	・体操の見本を示しながら元気よく歌い、児童の意欲を高める。（T１） ・歌を歌ったり動作をしたりするよう、体に触れる、言葉掛けをするなどして促す。（T２～T６）		
10：48 （10分）	2　『さつまのおいも』のペープサートを見て話を聞く。	・ペープサートに注目できるよう、提示の仕方、声の抑揚に配慮する。（T１） ・児童の言葉や動作を受けてやりとりしながら、話の理解を確かめたり、気持ちを共有したりする。（T１～T６） ・話の中の言葉や動きを模倣したり、自分なりの表現をしたりしたか。	・必要に応じて注意喚起を行う。 ・児童から自発的な表現があった場合は、言葉や適切な行動に置き換え、気持ちを共有する。（T２～T６） ・ペープサートや読み聞かせの声に注意を向け、声や動作で反応したか。	・ペープサートに注目できるよう注意喚起を行う。そばで言葉を掛けながら楽しい雰囲気作りをする。（T２～T６） ・必要に応じてそばでカードを提示したり、体に触れたりする。 ・ペープサートや声に注意を向けたか。 ・そばにいる教師の働き掛けに応えたか。
10：58 （25分）	3　芋掘りゲームをする。 ①　紅白のチームに分かれる。 ②　ゲームの説明を聞く。 ③　芋のつるを引っ張る。 ・　２チームで交代し行う。 ・　相手チームを応援する。 ④　芋を拾って自分のチームのかごに入れる。 ・　２チーム一斉に行う。 ・　芋が無くなるまで拾う。 ⑤　勝敗を聞く。	・ゆっくりとした口調で簡潔な表現を心掛け、ルールの説明をする。（T１） ・『いもほり』の歌を歌い、つるを引っ張るきっかけ作りをするとともに、楽しい雰囲気作りをする。（T１～T５） ・児童が興味を持てるよう、さつま芋に扮して綱引きをする。（T６） ・ルールに即した行動がとれるかを確かめ、分からない場合は再度説明をする。（T１～T５） ・相手チームを応援するよう、教師が模範となる。（T２～T５） ・ゲームのやり方が分かり、自らゲームを行ったか。 ・勝利したチームを紹介し、メダルを渡して賞賛する。（T１） ・「万歳」「残念」など気持ちを表現する方法を示したり、体に触れて一緒に万歳や拍手をしたりする。（T２～T６）	・自分で体を動かしてゲームに参加するよう、言葉掛けや指差しをする。ゲームの仕方を実際にして見せる。 ・教師と一緒に相手チームを応援するよう促す。（T２～T５） ・教師の見本や言葉掛け、友達のまねをすることにより、ゲームを行ったか。	・安全面に配慮するため、また、対象物に気付きやすくするため、別のつるを用意する。 ・対象物に気付くよう、近くへ誘導する。 ・自発的な動きを見守りつつ、対象物を動かしたり、体に触れたりして、対象物を持つよう促す。（T２～T５） ・対象物に気付き、持ったりかごに入れたりしたか。
11：23 （２分）	4　終わりのあいさつをする。	・活動終了の合図をし、整列する場所を示す。（T１） ・それぞれの方法であいさつするよう、見本の提示、言葉掛け、体に触れての促しをする。（T２～T６）		
前回の授業から改善した点	＊その時間に達成でき、評価ができる具体的な目標を設定し、評価をする教師を明確化する。 ＊児童の実態に応じた座席の配慮をする。			

＊評価の視点についても同様に、ゲームを行ったか。声や動作で反応したか。など、行動として表記し、評価しやすくした。

「芋掘りゲーム」

エ　授業評価シートより

授業者自己評価シート（一部抜粋）

○児童の様子 ・発問や言葉掛けに対して反応のよい児童もいたが、緊張していたのかいつもよりも反応しにくい児童もいた。 ・１名ではあるが、自主的に隣の児童に関わる姿が見られた。 ○環境設定 ・導入の体操・音楽がよかった。 ・アコーディオンカーテンで教室を区切ることで活動に集中できた。 ・ペープサートの大きさがちょうどよく操作しやすく見やすかった。 ・友達と一緒に活動するのに畑の大きさやつるの長さが適当であった。 ・児童の座席を決めたことにより、児童同士のかかわりが見られ、支援する教師の数を減らせた。 ○支援について ・目標についての話し合いを十分に行い共通理解を図っていたので、指導目標を意識した支援になった。 ・直接的な支援が多かった。

反省点（具体的な場面）	考えられる原因	次回への改善策
・直接的な支援が多かった。	・個人目標で具体的な行動をあげていた。目標の達成を願って支援するあまり、直接的な支援が多くなってしまったのではないか。 ・いつもより言葉掛けに反応しにくい児童に対して直接的な支援が多くなってしまった。	・活動内容が「生きる力」にどうつながるのかを考えて目標を設定する。
本時の自己評価から考えた今後の具体的目標		
・わくわくドキドキするような心が動く体験を大切にし、意欲的、主体的な行動につなげていきたい。		

参観者評価シート（一部抜粋）

よかった点	改善したらよい点
○児童の様子 ・それぞれの発達段階や理解力で興味を持って参加できていた。 ・みんなが前を向いて聞いていた。 ・子どもが自ら活動する場面や発表する場面が見られた。	○児童の様子 ・子どもの中に動きたいという気持ちが芽生えたときに座らされた感じがした。名前を呼ばれたときすぐに引きたかったと思う。

よかった点	改善したらよい点
・緊張しているようだったが、個別の目標は達成されたのではないか。 〇環境設定 ・興味・関心を高めるための教材が準備されていた。 ・はじめの号令がなかったが自然に授業に引き込まれていった。 ・話を聞く、ゲームをするという２本立てが分かりやすかった。 ・教室を分けて使う方法がよかった。 ・座席がよく考えられていた。 〇支援について ・Ｔ１の一貫した落ち着いた言葉掛け、静かで落ち着いた授業運びがよかった。 ・常に子どもたちの様子に気持ちを向け、反応に対応していた。 ・動きや言葉を引き出す歌がたくさん使われていて自然に流れができていた。 ・可能な限り子どもたちにさせていた。 ・児童の反応を見て教師が個別の目標を意識しながら支援できていた。	・何をいつまでするのかという見通しがもてるような支援があればよかった。 〇環境設定 ・座席によって前が見にくい子どもがいたのではないか。 ・お芋の大将は必要だったのか。 〇支援について ・言葉や数についてこの活動を通して学習指導要領に示されている何を押さえるのかを学年グループで話し合う。 ・紅白のチーム分けの時に顔写真等があるとよい。 ・ゲームの手順を視覚的に示しておく。 ・意欲を高めるために、前に負けたチームにも団結を促すような言葉掛けがほしい。 ・直接的な支援が多かった。言葉掛けしてすぐに手を差し出したり、体に触れたりすることが多かった。
授業者が評価してほしい視点	
〇教師の役割分担はできていたか ・紅白に分かれたときの役割分担が不明。 ・準備はサブの教師が行う。 ・紅白の責任者を決めておく。 ・全体としてはみんなでみようということができていると感じたが、危険な行為は止めてほしい。	
改善に向けてのアイデア	
・ゲームに対する意欲を高めるために、前回の勝敗が視覚的に分かる形での手立てがあるとよい。 ・座る時間を短く、綱引き場面を多くするとよい（聞く時間は１５分まで）。 ・体操をもう一回繰り返して、教師も大きな声を出したり、体を動かしたりするとよかった。 ・芋の数を数える際に、大きな数字や得点板を使うなどして視覚化してはどうか。 ・芋をひいたとき入れるかごは１つでよい。	

6　成果と課題

（1）学習環境のチェック

小学部は教材教具も多く教室内に物があふれている印象を受けていた。色々な物が刺激となりがちな児童の特性を考えて、必要な物を残し不要な物は除く、あるいは見えないようにするなど教室環境をもう一度見直すよい機会となった。

教材等の配置についても、児童の動線を考えた配置を考慮するようになり、児童自身が用具や材料を準備したり取りに行ったりするようになった。

（2）学習指導案の作成

個人指導目標について評価できる具体的なものを書くよう意識するようになった。実態把握が的確になされていることを裏付ける結果となった。

学習指導案の細案を書くに当たり、一つ一つの活動についての評価が必要であるのか、この書き方でよいのか、この項目についてはどのような表記がよいのかなどさらに作成の研修が必要であるとの結論が出された。

（3）授業実践（適正な教師数について）

小学部では、時間割毎の教師数を決めることができないため、学年会で週案を立てる際に、学習内容に応じて適正な教師数を話し合って決めることとした。少ない教師で効果的に授業を展開するにはどのようにすればよいかということを話し合った。その結果、担当する児童を決めるのではなく、授業の流れ全体を見ながらそれぞれの目標を達成するために必要な支援を臨機応変に行うためには、児童一人一人についての実態や目標についても共通理解が大切となり、それらについての話し合いが必要不可欠である。

参観者評価シートで、教師の数が多く感じられたということは、多いなりの支援がなされているかという「支援の質」についても研究する必要がある。

（4）ティームティーチングの在り方

小学部の授業では、ほとんどが複数の教師による授業である。そこでは、ティームティーチングが授業を左右する大きなポイントとなる。全体を見渡しながら授業を進めるチーフの役割、サブはチーフが指導しやすいように、時には手本を示したり、児童を直接支援したり、雰囲気を盛り上げたり、教材の準備をしたりするなどチーフとあうんの呼吸で授業を作っていくことが求められる。そのためにも、個別の指導目標を明確にして、授業のねらいや支援の方法など細かな点での話し合いを行い、共通理解を図った上での指導が必要である。今年度は、特に数多くの授業研究会を開き授業がスムーズに展開できるようになった。

課題としては、放課後の限られた時間を有効に使った、効率よく共通理解を図るための検討会の持ち方が上げられる。

（5）教材・教具の工夫

小学部では、普段から一人一人に合った教材・教具を工夫して準備をしており、授業評価シートを見ても明らかである。今回のテーマである、「主体的な行動」を引き出すための教材・教具は今まで以上に工夫・改善されてきた。一斉指導では、テレビを使って大きな映像や、音楽、動物の泣き声や肌触りなど、見る・聴く・感じるの五感をすべて使った教材を工夫した。今後は、提示の仕方や効果

的な使い方等についての更なる研究が必要である。

（６）授業参観・授業評価シート

普段は自分のクラスのことに追われ、他の教師の授業を見ることが難しいが、今回、他学年や部の授業を見ることによって、客観的に授業を見るよい機会となった。また授業評価シートの活用により、授業者としての自己評価とともに、第三者からの評価を受け、よい点を知るとともに、改善すべき点についても具体的に知ることができ、授業改善につながった。

（７）支援について

小学部段階では、児童の実態から直接的な支援をすることも多いが、主体的な行動を引き出すための支援はどのようにすればよいか。支援の質を高めるということはどういうことかを考えるきっかけとなった。

（８）児童の変容について

授業の見直しを進めていく中で、児童が見通しを持って活動に取り組むようになり、大人数の一斉指導でも落ち着いて授業に参加し、何をするかが明確になって、自信を持って活動することが増えた。

また、一人の世界から教師とのかかわり、友達同士のかかわりへと広がりも見られるようになってきた。

7　終わりに

今回の授業改善プロジェクトは、教師一人一人が日々の授業を振り返り、よりよい授業について考える機会となり、意識の変革につながった。

また、学年グループでの数多くの話し合いは、目には見えないが大きな宝となった。今年度は授業全体についての研究が主となったため、授業中の細かな支援をどうするか、個別の指導計画の中に教科の指導内容をどう盛り込めばよいかなど、来年度への課題も残されておりさらに研究を深めていきたい。